

高校生新書 1

E線行進曲

竹田友三著



竹 田 友 三
たけ だ とも ぞう

1922年 三重県に生まれる

1947年 京都大学法学部卒業

1948年 高校教諭，現在に至る

著 書 『高校生』（三一新書）『高校生諸君！』（三一新書）
『高校生手帳』共著（三一書房）

現住所 三重県津市大谷町208の56

E 線 行 進 曲

定価 230 円

1964 年 11 月 5 日 第1版発行

著 者 © 竹 田 友 三
1964 年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 暁 印 刷 株 式 会 社

製 本 所 本 間 製 本 株 式 会 社

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電話東京 (201) 9581~5 番

振替東京 84160 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします 高校生新書 1

竹田友三著

E線行進曲



高校生新書

三一書房

E線行進曲／目次

I C 調物語

1	お茶目な面々……………	九
2	最初のさわぎ……………	一九
3	揭示と談判……………	三六
4	娘のはなし……………	四七
5	易者吞象……………	五九
6	ひとつの決算……………	七九

Ⅱ E線行進曲

7	明るい斜面……………	二三
8	皆の要求……………	二三
9	能力問答……………	二五
10	ここでまたさわぎ……………	二九
11	合同文化祭……………	三四
12	反省会……………	三六
	あとがき	

I

C 調物語

空にや春風吹いているう
おいらはテストでふいているう
教師はなんでもべカラスでえ
おいらの首をしめてくるう

1 お茶目な面

おれの名はいまだ・わかき、漢字で書けば今田若樹、凡倉高校二年D組の平凡野郎である。D組といっても、別に、Lが文学部でラブレターの名手、Tが工学部でトッテンカンやトンチンカンというほどに念の入ったものではない。Aが阿呆で、Bが馬鹿、Cが茶目公、D鈍才というわけでもない。平平凡凡の組を六つならべた四つ目がD組というだけの話。それだけの話。つまり、要約して一行でいえばどこにもいる平凡な高校生群。

いまからお話することも、これまた凡才高校生のお話。にきび面に虹が二回とまって、ぷういと去っていったという類の話。あまり真面目な顔でよみかかれるとてれくさくなる話である。クラブボックスで、「なんかイカス話でもないかな」とあくびする奴がいた時に、ひょいと冗談ばなしを入れてやる。そうした時のネタ本ぐらいの気持で、あるいはおべんきょう、お宿題とやらにおつむが固うなった時に、ずでんと寝そべって読む本の類、そう思ってたかかって

下さい。そうそう、御如才なかるうが、先^{せん}なんとかさまにはあまりおっぴらに見せない方がよいだろな。年がら年中、おまじめで、お固くて、おきれいな訓話などなさっている先なんとかさまにはね。でもね、同じ高校生どうしの気持と気持、胸と胸、いおうとしてることのまじめな部分は、きっと分ってくれると思うんだ君たちはね。泣こうと笑おうとわめこうと、おれは税金もとらないし、職員会議にもかけない。ぞんぶんに共鳴し、反駁し、さわいで下さい。その方がありがたい。

前口上とかおやじの説教とかいうものは、短かければ短かいほどよいものだ、これはイザナギノミコトの大昔からきまっている。さっそく開幕いたしましょう。とはいえ、最初は、ぐっと渋くやさしく、C調ではじめていきましょう。「てなことというのが怪しい」ってか……はっはっは。あまり急ぐな。

そよ風が東の方から吹いている。ぼんくら連山は西の方にある。真白い雲はぼんくら町の屋根におおわれた丘の上でふわりこふわりことただよっている。町は人口一万余。犬何百匹きまではでているが、鼠の数は集計があわぬ。目下、町議会で特別委員会をつくって対策中とある。

町の丘の下を国鉄と私鉄とよだれ川がもつれて西から東へ走っている。いや鉄道の方は東から西でもかまわない。東方三里の頓馬市とんままでは小さな坂があるのだが上り坂でも下り坂でも料金は全く同じである。

そのよだれ川畔を四月八日の朝八時、おれは学校の方へ歩いていく。始業式とかがあって二年生になるわけだ。ならんで歩いている、おれよりちょっと馬鹿ぶらの男——といってもこれは主観の相異があるだろう——この男が井枯いかれ権三ごんざうって男だ。中学時代から家が近いし、まあ友だちというわけだ。中学二年生の頃に少しばかり勉強をサボっていたので、いまはおれよりちょっと下位。わりにだんまり屋だから、純情なのか陰険なのかわからない。

空にや雲雀がぴろろと鳴く。丘では鶯がまだホケキョ。足の下の川には、めだかもちろろと泳いでるだろうがちと見えない。

「おはよう」

うしろから自転車でやってきて、おいぬぎざまに明るい声かけていく娘は銚子ちやうしのりこ紀子という娘、同じ組である。

井枯は体操部に入っていたが途中でやめた。その時に同じやめた男で南木八郎という男がいる。なんぎ・やろうという名のとおり、体がやけにでっかくて、同じ学年の番長タイプ、すこ

うしなんぎですわねっぼい男。紀子は、その八郎とわりにしたい。ガール・フレンドというには高尚になりすぎるが、スケといってはかわいそうだ。あんがいまあ少うし気の合うぐらいなのかもしれぬ。おれとは、どちらもサッパリしてて、可もなく不可もない間柄の娘である。おふくろゆずりで気が好くて、おしゃべり。内申書には明朗快活と書いてあるだろう。内申書って奴は学校生産物のカタログみたいなものだから、ぐずな奴なら「思慮に富み慎重」と書く。でしゃばりものは「積極的」と書く。

「おい、担任は誰になるかなあ」

と井枯がいった。

「さあ、ビンタだったらことだな」

「でもあいつ案外、単純で面白いぜ、おれは伊井勝古いいかつこよりはましだと思ふなあ」

堂鳴敏太は体育の教師で二十八歳。名は性をあらわすとか年中どなっているのは、それが集会指導係という役目だと思っただけでもないらしい。おれは苦手だ。しかし井枯の方には伊井勝古が苦手らしい。この人のことはあとにでてくるが簡単にいえば文化部型のやわらかい方の教師だ。

ずうっと川畔を下って土手を登る学校である。××県立凡倉高校はわがまなび舎だ。

口の悪いのがいて「旧制工業専門学校が大学工学部と改称して工業学校並になり、旧制三等中学校が高校と改名して高等小学校になった」といったことがあるそう。確かに、義務教育からほとんど直通に入るしいまや義務教育終了者の過半数が高校生なのだから、高校の先生が「生徒の質が下った」と歎くのもわからないでもない。しかしそのことは国民全体の教育水準が上ったことになるのかならないのかとなると、おれも分らぬ。先生も知らせん。とまれ、駅弁売ってる町に大学一つという世の中であって、凡倉町は駅弁を売ってて大学はないから、おれたちは大学生代理をしているわけではなからうか。生徒数およそ一千と二百のこの高校が、昨今はぐいと増水して一千と五百人。少なくともこの一人一人は、頓馬高校へは難しかろうが定能学園へぶちこむには惜しいという程度の秀才才媛が、なかには県議さんに手をひいてもらったものも一人二人はおろうけれど大多数は自力で入ってきたものである。全国的には八流か九流か知らないが、県下では堂々の二流高校。体育館の時計は卒業生の寄贈、図書館の書架は同窓会の寄付、事務室の補助員さんはPTA雇用でも、授業料を県へおさめるから堂々たる県立高等学校である。もっとも県立だ私立だ、一流だ八流だということをおれはきらいだけれど、手っとり早く紹介するにはいいと思って、しばらくはそういつておくことにする。関東大震災が十度こようとうちの息子は東大へ入れるのだというおばさんたちにも分りがよからう。

靴のさきから、おつむのどまんなかまで、大日本帝国製だという噂の高い古井^{ふるいきわみ}究校長先生の一場の訓示を中心に始業式がもたれた。教頭浦野有助先生は、教師席にてんでむつつりと坐っていた。井枯が、

「教頭の奴、校長になりぞこねてまだむくれているぜ」
とささやいてきた。さて式がすみそうになるとその教頭が立ち上って、

「では、クラス担任と教室を発表します」といった。皆さすがに緊張する。二Dの番になった時、

「二D、伊井勝古先生、十八番教室」

ざわめきがおこるのは人情。担任：生徒は校長：職員に似ているが、それ以上に生徒は担任をボスとして大事に思うものである。

伊井勝古先生は、三十五歳の生物の先生、ハンサムで秀才だろうと自分で思っている面構え。夜店で買った蝶ネクタイ、縞の背広はレディメイド、千五百円のビニールシューズ。時にギターをかついで御登校。お得意の曲はアロハオエー。いや阿呆は阿呆え。調子にのってくる。と国語の先生だしぬいて詩を書く。土曜の午後には碁を打つ。禄がつきたら質屋へいく。蜂が

さしたらキ・ユ・となく。いささかキザでホラフキで、新しがりでロマンチストという世評。純情派でカモにしやすいとは生徒の評。生徒に扇動される教師は、校長や教頭から見ると生徒を甘やかしおだてる教師ということになる。生徒を上手にしめつける教師はかげでは生徒にぼろくそ。つまるところいえば校長や教頭は生徒と教師の関係なんにも知っちゃいねえってこと。

クラスはざっと五十四名。いまどきの高校では適性規模。「これでは個性の伸ばしようがない」と伊井先生はちらっとなげくが、御心配無用。個性なんてものは仮りにあっても先公様様の前で出したりするものではない。出したが最後、「生意気な野郎だ」といわれ、「非行傾向生徒」と注意される。おとなしかろうよかろうとは学校教師の判断の尺度。猫の皮は三枚かぶってけろりんちゃん。

ここで二行あけたのは、あくびしていねむりしてとろりんこんとしている間に、桜は散りしき緑は萌え、紀子は一月近く婆さまになったという空白である。授業はあれど頭には入らず、ノートはあれど漫画入りという空白である。ホームルームは室長青井秀哉。読んで字のごとくひょろっと青い奴だ。「民主的」に選挙するときまっpegこういう奴が選出される。こういう奴